地域子育て支援研修事業＜愛知開催＞

≪開催概要≫

■開催日：平成 27 年 10 月 17 日（土）　10：00～16：30
■会　場：愛知学院大学　名城公園キャンパス
　　キャッスルホール　２Ｆ　1202 教室
■主　催：ＮＰＯ法人子育てひろば全国連絡協議会
■後　援：（社福）全国社会福祉協議会・愛知県・名古屋市
■協　力：ＮＰＯ法人子育て支援のＮＰＯまめっこ
■参加人数：１７１名

≪プログラム≫

■開会挨拶

安田典子さん　NPO 法人くすくす　理事長・ひろば全協　理事

■プログラム１

あらためて地域子育て支援拠点事業の４つの基本を考える
◆こどもが育つ環境づくりとは？
◆大人にとっても居心地のよい拠点とは？
◆拠点におけるプログラムのありかたとは？

【コーディネーター】
坂本純子さん　NPO 法人新座子育てネットワーク　代表理事・ひろば全協　副理事長

【事例報告】
丹羽洋子さん　NPO 法人かばさんファミリー　代表理事
丸山政子さん　名古屋市子ども・子育て支援センター　センター長

【データ提供】
伊藤早苗さん　まちひとぷら座かんかこかん
松村由美子さん　おしゃべりサラダ
牛田由美子さん　NPO 法人ファミリステーション Rin

地域子育て支援事業の基本の４事業**「①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進②子育て等に関する相談・援助の実施③地域の子育て関連情報の提供④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施」**について、配布したガイドラインも活用しながら、事例報告や会場参加者からの実践紹介と共に、あらためて事業実施において大切にすべきことや理念について考える。

【事例報告】

◆丹羽洋子さん　NPO 法人かばさんファミリー　代表理事

かばさんファミリーの成り立ちや山県市の情勢を紹介しながら、「おやこＹＹひろば」について説明した。ひろばを開設するときに目指したのは「おしゃれなカフェ」。親（保護者）がほっとできる空間。ひろばでは利用者にとって身近な存在である「ママスタッフ（子連れスタッフ)」がいることで、相談しやすい環境づくりに努め、意見交換などできるようにしている。利用者同士を繋げるためのイベントも開催。「他がやっているようなことはやらない」「他ができないことをやる」を目標に、当事者だからこそできるイベント内容を展開している。

出張ひろばでは地域を巻き込み、多世代の交流をもっと広げたいと思い活動。外遊びひろばでは山県市の自然の豊かさを活かし、体を使った遊びの提案や、山県市の良さを再発見できるように伝えていく。これも大きな役割である。基本事業のひとつである情報の提供に重点をおき、子育ての情報を発信する役割として「facebook」を開始。親たちの望む情報を提供できるように「情報局取材班（現役のママたち)」が取材にいっている。

当事者である親たちの気持ちを考え、寄り添うことを忘れず、「子育てを楽しもう！」をスローガンに支援を繋げていきたいと思っている。

◆丸山政子さん　名古屋市子ども・子育て支援センター　センター長

「７５８（なごや）キッズステーション」の設置主旨を紹介しながら、親子を取り巻く現状やキッズステーションの役割について説明した。

４つの基本事業をもとに、行政・地域・大学・企業など様々な主体とのネットワーク形成と連携をして、子育て家庭を社会全体で支える仕組みづくりに取り組んでいる。

「交流の場の促進」としてキッズパークを紹介。子育てコンシェルジュを３名配置し、子育てサークルや支援団体の活動を支援するために場の提供も行っている。

「相談・援助」では様々な窓口を設け、気軽に相談できる「ぷらっと相談」やじっくり相談できる「個別相談」・「電話相談」を実施。じっくり耳を傾け、安心して帰ってもらえるように配慮している。

子育て支援活動の実践者を対象に「なごやこども・子育て未来プロジェクト」が、それぞれの専門性を活かして専門領域の相談に対応していることも紹介した。

「情報提供」ではホームページや情報誌「７５８キッズ☆なび」でイベントなどを提供していることを紹介。携帯サイトや情報ガーデン・ライブラリーで情報提供をしている。

「講座の開催」として、①子育てを応援する講座②親支援プログラム講座③子育て支援者向け講座、の３つを紹介。支え合う活動や、学び合う中でつながりを創ってその後の事業に活かしていくことも狙いである。

また、子育て支援ネットワークの拠点として、支援者の育成の活動支援や、大学との連携、企業との連携をとり、つながり・寄り添い・支え合える環境を創り、切れ目のない子育て支援をしていくために、様々な人と講座を通してゆるやかな子育て支援ネットワークになっていくように心がけていくことも重要である。

【データ提供】

◆伊藤早苗さん（まちひとぷら座かんかこかん）岐阜県高山市

基本事業の「子育て関連情報の提供」について紹介。高山市街の商店街の空き店舗でひろばを運営している。毎年 12 月には「冬のあったか縁日」を開催。今年で９年目の開催となる。この日は「市役所丸ごとこどもの城」と題して、高山市役所全体を借り、市内の子ども、子育てに関わる支援者や行政などに、日ごろのそれぞれの活動を、50 近いプログラムとして展開してもらっている。毎回、子ども連れの親子を中心に、約 4,000 人の参加があり、市内の子育て支援に関する様々な情報を、一挙に提供する機会となっている。この縁日の開催が、その後の支援者同士の交流や連携に繋がっていることも重要なことと考えている。

また、ひろばの中での子育て関連情報の提供については、前述の「縁日」で培ったネットワークを活かし、かんかこかんの１階で、高山の子育てに関する情報を気軽に見ることができるようにしてあり、日頃の利用者はもちろんのこと、子連れの旅行客も気軽に立ち寄って情報を得られるよう努めている。

◆松村由美子さん（おしゃべりサラダ）長野県飯田市

基本事業の「交流の場の促進」を紹介。仲間で来るというより一組で来ることも多いひろば。ひろばの面積が狭いので、自然と利用者同士の距離が縮まり交流しやすいのが魅力。

スタッフが利用者から相談を受けた時も、一対一で話すこともあるが、話の中で他の利用者に繋げて、親同士の交流が進むように配慮することがある。

また利用者の中に楽器を演奏できる方がいることに気づいたスタッフの発案で、ミニコンサートを開催。利用者同士が特技でつながることもできた。

現在 11 名のスタッフを配置。子連れスタッフなど幅広い年齢層で活動している。スタッフが面倒を見る人ではなく、利用者さんと同じ位置にいる。

イベントより日常を大事にしていて、スタッフとの交流や子ども同士、親同士も交流し、情報の交流も生まれたらいいなと思っている。

◆牛田由美子さん（NPO 法人ファミリーステーション Rin）愛知県日進市

基本事業の「相談・援助」について紹介。ファミリーステーション Rin は、「Rin のおうち」と「日進市子育て総合支援センター」の二つのひろばを運営しているので、特徴の違う２か所での見守りが可能。日進市は核家族が多く、気軽に相談できる人が周りにいない人も多い。親にとっては相談に行くことも大変であることを理解し、まずは相談しやすい環境づくりに配慮しながら、「相談・援助」に積極的に取り組んでいる。個別相談も行っているが、対象別、目的別の小グループで集まることで問題を表出しやすくしたり、連続した講座で信頼関係を築きながら定期的な働きかけと見守りを行っている。

支援センターでは、①保健師や栄養士など専門職による相談日、②5・6 ヶ月くらいまでの赤ちゃんを持つ親子を対象にしたサロン、③支援センターに来られない方を対象としそれぞれの地域の児童館で年齢別に集まれる場、を提供している。

ひろばで対応しきれない相談に関しては、支援センターと連携したり、他の機関との連携も可能。日ごろから保健センターや児童相談所と良好な関係づくりに努めているが、まだまだ活動が周知されていないので、利用者を待つのではなく、直接出向いて行く姿勢も必要だと考えている。

■プログラム２　基調報告

地域子育て支援拠点事業の役割と展望　子ども・子育て支援新制度について

【講師】竹中大剛さん　厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化総合対策室　室長補佐

まず、地域子育て支援拠点事業の成り立ちや４つの基本事業を中心とした概要説明があった。さらに、平成 27 年 4 月から本格施行された子ども・子育て支援新制度の概要説明があった。これは、社会全体による費用負担として消費税率の引き上げによる恒久財源を確保し、質と量の拡充を図ったが、それは社会的責任の重さも付加されたということ。今後は、市町村子ども・子育て支援事業計画がしっかり実施されているかチェックをしていく必要もある。

そして、利用者支援事業については、子ども及びその保護者、または妊娠している方がその選択に基づき、教育・保育・保健その他の子育て支援を円滑に利用できるよう、必要な支援を行うことが目的であり、事業内容としては、身近な場所で子育てに関する情報提供や相談・助言等を行うとともに、関係機関との連絡調整等を行うことと説明された。

さらに、地域子育て支援拠点事業の今後については、現在の 6,538 か所から 2020 年までに 8,000 か所の数値目標があるが、市町村子ども・子育て支援事業計画にしっかりと位置付け、住民の理解を得ながら拡充することが求められている。そのためには、当事者発の良さを大事にしながらも、質の向上と人材確保のために子育て支援専門員研修の受講が望ましいと話された。

■プログラム３　講義

地域子育て支援事業と利用者支援事業が一体的に運営されていくために必要な視点や、地域子育て支援拠点で取組むソーシャルワークの可能性について学ぶ機会として、橋本先生にご登壇いただいた。まずは、ソーシャルワークの基本的な概念を説明いただいたのち、利用者支援事業そのものの内容や対象、業務といった基本を押さえていただいた上で、利用者支援専門員の役割と力量について、事例を交えながら具体的に説明していただいた。

地域子育て支援拠点におけるソーシャルワークとは

【講師】橋本真紀さん　関西学院大学　教授

子ども・子育て支援法において、「地域子ども・子育て支援事業は、子ども及び保護者が必要な情報の提供及び助言を行うとともに、関係機関との連絡調整その他の内閣府令で定める便宜の提供を総合的に行う事業（中略）」とされているが、その役割を考えていくうえで“ソーシャルワーク”の知識が役に立つ。

利用者支援事業の目的の一つは、子どもが健やかに成長することができる地域社会の実現である。その実現のために、子育て家庭に身近な場所で「利用者支援」と「地域連携」を行うことが非常に大切である。

利用者支援事業の基本姿勢は、①「利用者主体の支援」：取り組みの主体を相談者自身におくことが必要である。②「個別ニーズに合わせた支援」：対象を深く理解し、制度や事業側に相談者を合わせるのではなく、家族のニーズに合わせて支援を作っていくことが大切である。③「包括的な支援」：生活の困り感すべてを把握しながらインフォーマルな資源とも連携して支援していく事が必要である。④「子どもの育ちを見通した継続的な支援」：家族が出会うであろう困難を取り除くのではなく、家族が問題に取り組んで行けるように子どもの成長と家族関係を見通した支援が必要である。⑤「早期の予防支援」：困り感が小さい間は社会資源とつながる力が残っていて使える資源も多い。地域の資源が互いにつながっていることで、子育て家庭が一つの資源を入口にして地域につながることが出来るのである。

子育て支援コーディネーターは、家庭の包括的支援、家庭の状況の見極めと家族側からの状況の理解、子どもの育ちを見通すコーディネート等、広い視野とネットワークを活用した力量が求められる。また、要保護児童の支援と違って、利用者支援事業は予防支援型であることを理解しておく必要がある。

■プログラム４　パネルディスカッション

「寄り添う、広げる、深める」～親子にとって身近な場での支援～

【コーディネーター】安田典子さん　NPO 法人くすくす　理事長・ひろば全協　理事
【パネリスト】橋本真紀さん　関西学院大学　教授
中橋恵美子さん　NPO 法人わははネット　理事長・ひろば全協　理事
中條美奈子さん　認定 NPO 法人マミーズ・ネット　理事長・ひろば全協　理事

◆中橋恵美子さん　NPO 法人わははネット　理事長・ひろば全協　理事

香川県高松市の利用者支援事業の取り組みについて紹介。平成 25 年 11 月、高松市は地域子育て支援拠点「機能強化型」4 拠点についてプロポーザルコンペを実施した。その結果、旧ひろば型から 2 拠点、旧センター型から 2 拠点が選ばれ、平成 26 年 4 月、NPO 法人わははネットを含む強化型 4 拠点がそのまま利用者支援事業になった。

高松市では、地域子育て支援拠点のスタッフを「子育て支援コーディネーター」と呼んでいる。行政各種機関、他の子育て支援団体及び保育園等の施設との連携を進めていく中、当初は連携強化の必要性に否定的な意見があったものの、足繁く通い必要性について説明し、ようやく関係者の理解を得られて、今では地域連携が図られている。そうした中、「子育て支援コーディネーター」が子育て相談を切り口に、相談者と常にやりとりをすることで子育ての問題だけではなく家族の問題を見分けて、行政各種機関、他の子育て支援団体及び保育園等の施設につなげている。

このような支援を実施することができるのは、4 拠点の設置にはじまり、行政各種機関、他の子育て支援団体及び保育園等との信頼関係が築けていればこそである。

◆中條美奈子さん　認定 NPO 法人マミーズ・ネット　理事長・ひろば全協　理事

早くから上越市では、子育て支援に力をいれてきた。22 の中学校区に対し、拠点は 26 か所ある。上越市は、面積が広く人口が少ないので、同じ月齢の子育て中の母に出会えない事が多い。また、豪雪地帯のため冬は外で遊ぶことが困難となる。雨や雪でも人と人がつながれる場所として、拠点 26 か所の中核施設である「子どもセンター」があり、その中に情報提供の機関である「じょうえつ子育て info」を設置した。

「じょうえつ子育て info」は以下の事業に取り組んでいる。①子育てサービスのコーディネート。行政と支援者の間に入って行政の用意したサポートにつなげること。そして、最終的に本人が決定する事を大切にしている。②初めて子育てする親、転入者への積極的な働きかけを行い、子育て支援情報を提供するため利用者目線での「子育て info ハンドブック」の作成。③ひろばに遊びにきて困っている人や心配な親子を地域で助け合えるように、地域と連携して家庭を支えることや、地域で活躍する親子になる手助け。そのほか、同行支援や訪問支援を実施している。

事例の紹介では、隠れたニーズや SOS が潜んでいたためコーディネートを必要としたケース、訪問や同行サポートのケースを紹介。「大切なことは、大ごとにならないうちに解決することである」と訴えた。

◆ディスカッション

【安田さん】

コーディネーターは、どんな人がやっているのか？適性はどうやって見分けるのか？他の拠点や行政等と、どうやって連携・調整しているのか？

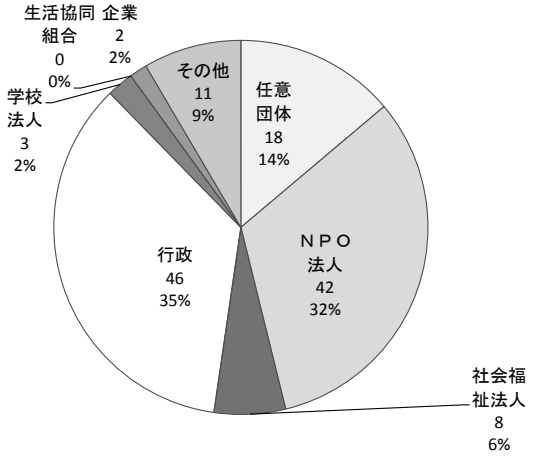
【中橋さん】
週に5日9時～5時の専任コーディネーターが2名いる。社会福祉士、保育士の資格がある。
適性は、センスと感覚。香川県コーディネーター養成講座やその他さまざまな研修や講座を受けて一定の知識がある人。そして、利用者との日頃の接し方を見て判断をしている。他の拠点等との情報共有は、利用者に情報共有の可否を確認し、了解が得られた場合は共有している。
【中條さん】
適性は、人の話から隠れたニーズをひろえる人。日ごろの利用者への対応をみる。地域との連携が必要なので出ていくことをいとわない人。子育て支援コーディネーターの研修に参加した人。
「じょうえつ子育てinfo」がしっかり機能できているのか、大学の先生や企業の人たちにも関わってもらいチェックしてもらっている。
【橋本さん】
現在はさまざまな人や機関が利用者支援事業に繋がっているようになっていたとしても、そのような連携は、足繁く通う以外にどうやって作っていったのか？ また、行政との連携はどのように図っているのか？
【中橋さん】
関係を作るには、まずは何度も通うことである。その際に、事例を入れながら話をする。家族の問題を共有し、支援したい気持ちが同じであることを理解してもらう。同時に、市の会議やコミュニティの会議や校長会・園長会に参加し関係構築に努めた。また、市から他の子育て支援団体や校長等に拠点事業について何度も通達を出してもらいバックアップを図ってもらった。
【中條さん】
元々こどもセンターは子育て支援拠点中核施設であるため、月1回の母子保健の日に、拠点のスタッフと各ひろばのスタッフの交流をしている。その交流の積み重ねで、対等に事業を行うパートナーとして認めてもらった。また、行政と定期的に連絡会議を行い、今後の進む方向等をしっかり議論したことや拠点での実績が信頼関係の構築につながっている。

■終了挨拶
坂本純子さん　NPO法人新座子育てネットワーク　代表理事・ひろば全協　副理事長

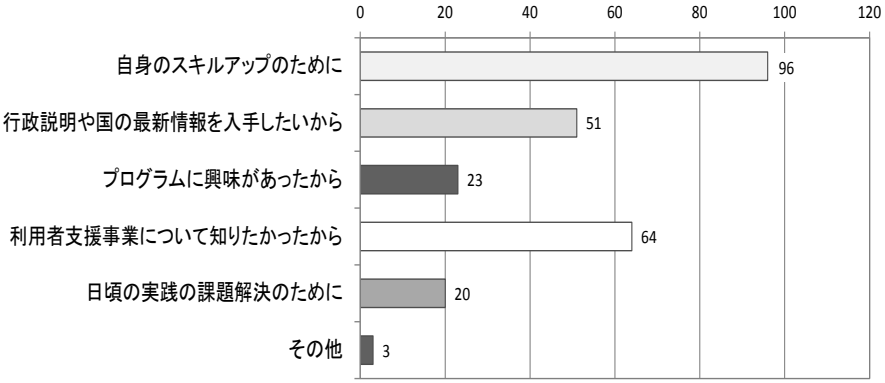
【愛知開催】アンケート結果サマリー

◆**回答者内訳**:男性４名・女性120名・未回答６名【20代４名、30代15名、40代38名、50代52名、60代13名、未回答８名】

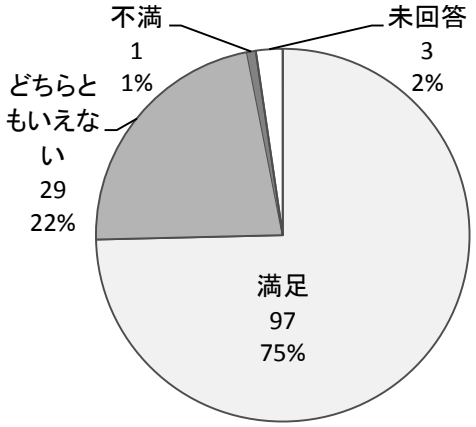
（１）所属



（２）研修に参加した目的



（３）研修全体についての評価



（評価の理由）
・基本事業から利用者支援の説明が具体的で良かった。
・拠点事業の基本を聞き、これからの拠点では何が必要かということを考え、コーディネーターとしての活動を広げていかなくてはいけないと思った。

（４）各プログラムの感想

◆プログラム１

・違なるタイプの実践内容を聞き、様々な子育て支援の方法があるということを改めて知ることができた。
・寄り添いながら気づきを大切にして支援し、利用者が自分で判断できるよう手助けをする事が大切だと分かった。

◆プログラム２　基調報告

・子ども子育て関連3法の話は分かりやすく、消費税増収分が子育て支援に使われるという話は興味深かった。
・子育て支援と利用者支援事業との二つで子育て家庭を支援していくことの大切さが分かった。
・自分自身が支援員として成長し、また新制度を把握して利用していけるよう学んでいきたい。

◆プログラム３　講義

・「つながりが、個別のサポートを支える」という言葉に共感した。
・地域のネットワークづくりと顔が見えるお付き合いを大切にしたい。
・個々の利用者に寄り添った支援をするための人材育成の重要性を強く思い、長期的な計画作成をしたいと思った。

◆プログラム４　パネルディスカッション

・日常の遊びの場としてだけでなく、それぞれの親子に寄り添い、支援の型を考えていける場、支援者でありたい。
・日常の会話の中で隠れたニーズやSOSを見つけ、それを一緒に考えコーディネートしていくことが大切だと感じた。

（５）その他、ご意見・ご要望

・利用者支援事業は、拠点に子どもの成長を一緒に見守ってくれる人、いつでも相談できる信頼できる人がいて安心できることだと思った。予防することの大切さを感じた。